

今の仕事について、 当時のまなびと今の仕事がどうつながっているか？

【シンポジスト】

松森 大 (大宮すずのきクリニック／コミュニティ福祉学科2002年卒業・1期生)

杉本 明彦 (大同特殊鋼株式会社／コミュニティ福祉学科2006年卒業・5期生)

大塚 光太郎 (NPO法人子どもグリーンサポートステーション／コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクト陸前高田現地コーディネーター／コミュニティ政策学科2011年卒業・10期生／コミュニティ福祉学研究科2013年修了)

高橋 裕一 (大田区役所 蒲田生活福祉課 生活保護ケースワーカー／福祉学科2012年卒業・11期生)

杉原 宗 (高校教員(保健体育) 着任予定／スポーツウエルネス学科2012年卒業・11期生／コミュニティ福祉学研究科博士課程前期課程)

【司会】 大冨賀 正昭 (まなびあい運営委員／コミュニティ福祉学科2004年卒業・3期生)



■ シンポジストによる自己紹介

大冨賀 まずシンポジストのみなさまの今のお仕事と就職したきっかけを伺いたいと思います。

松森 はい、古い時代の2002年卒(1期生)の松森と申します。よろしく申し上げます。

色々なことが変わってきているなど少し浦島太郎のような気分になって松尾先生のお話を聞いていました。

私は、今は大宮すずのきクリニックという所で、常勤の臨床心理士のスタッフとして働いています。週に4日は精神科デイケアという所の業務に就いて、1日はカウンセリング業務をやっています。今年からですけれど、このコミ福で1日だけ授業を1コマ持たせていただいています。

今の仕事に就きたいきさつというのは、私は大学のときに、センブラルというサークルを仲間と一緒に作って、その仲間とともにいろんな所にボランティアに行ったりしていたことに始まります。そこで病院のワーカーさんと知り合い、紹介していただいた縁で今の仕事に就きました。働くようになって10年ぐらいたち

ました。

大冢賀 ありがとうございます。松森さんが在学されていた時には、心理学の先生がコミュニティ福祉学部がたくさん在籍されていましたが、当時の学生の学びはどうだったでしょうか。

松森 そうですね。やっぱり福祉と心理であったり、また宗教であったりとか、色々な学問を学ぶ機会があったので、非常にぜいたくな時間だったなというふうに思います。特に、キャンパスに学生自体が少なかったのも、先生方ともよくおしゃべりをさせていただいたりとか、そういう機会も多かったかなと思います。

大冢賀 キャンパスに学生が少なかったというのは、1学年300人ということと今と比べると多いが、その学年しかいなかったから少なかったということですか。

松森 はい、そうです。4時過ぎると誰も校内におらず本当に閑散とした感じでした。だから、ほんとに「ああここ大学だったのか」と改めて感じるぐらいで、今の大学の状況の方が慣れない光景ですね。

大冢賀 私も2004年卒（3期生）なのですが、当時は建物もあまりなかったですね。

松森 建物はなかったですね。今大学にサブウェイやファミリーマートができていて驚きました。

大冢賀 ありがとうございます。では、杉本さんお願いします。

杉本 皆さんこんにちは、2006年卒（5期生）の杉本と申します。私は、大同特殊鋼という鉄鋼メーカーで働いています。多分シンポジストの中では異色かなと思います。

どのような会社かという、例えば皆さんがボールペンでメモを取ってると思うのですが、その先端は、ほぼ私たちの会社で、ほぼ100パーセント大同特殊鋼のボールペンチップを使って作っています。あとは自動車メーカーさんに鉄を売ったりとか、そういう会社で営業マンをしています。

この中にも私の大学時代を何人か知ってる方が居ますが、私が就職した経緯は、いろいろ福祉に関して向き合おうと思っていろいろなことを大学時代にやったつもりなんです。しかし、そもそも私はコミュニティ福祉学部には別に入る気持ちもなく、ただ受験日が空いていて父親が、ああそうなんだ、願書を提出したぐらいな感じで、たまたまほんとうに入って来て、そのまま福祉学部に入ったという事情があります。

ですので、敢えてがんばって福祉の現場でアルバイトしてみたりとかいろいろやったのですが、でも初心に従って就職活動をして結果、今の会社に入ったという感じです。

当時の僕が学んでいたコミュニティ福祉学部の様子ですが、今も変わらないと思うのですが、この比率から見ても非常に女性が多くて、男子校の僕はもう毎日楽しくてしょうがなかったです。今も昔も変わっているか分からないのです

けれども、私の様子はみなすごくいい子でした。例えば、グループワークとかグループの意見まとめなさいっていうときに、女の子同士だとみんななかなか他人に意見を求め過ぎていて、意見がまとまらないとかいうことがありました。すごく楽しい4年間を過ごさせてもらったなというふうに感じております。以上です。

大塚賀 ありがとうございます。それでは、大塚さんよろしく申し上げます。

大塚 皆さん、こんにちは、大塚と申します。先に言っておきますと、一応きちんと卒業しています。私は今NPO法人子どもグリーンサポートステーションという団体が陸前高田のほうで活動させてもらっております。また、松尾先生がお話の中で紹介していただきましたけども、コミュニティ福祉学部の東日本大震災復興プロジェクトの陸前高田現地コーディネーターという名前をいただいて、陸前高田にある一軒家、そこに住まわせていただいております。

そこで、コミュニティ福祉学部の現地コーディネーターとしては、松山先生が定期的に陸前高田のほうでいろんな方と交流されて、その交流されている方と私も出会わせていただいて、一緒に仲良く交流を続けさせてもらっているというところなんです。学生さんが来てくれるときに、いつもそこに1人で住んでいます。空き家で、向こうのおうちはすごく大きいので1人で居るのがちょっと申し訳ないくらいなと思うのですが、そこに学生さんが来ていただいて地元のかたがたと魚、おいしいお刺し身とか学園祭、IVY Festaで作られたそうですけども、さんまのつみれ汁とかいろんなものを地域の方と作って夕食会をしていて、その場所に一緒に居させてもらっているというような活動です。

NPO団体の職員としては、お父さんとかお母さんといった大切な人を亡くしてしまった子どもたちの居場所というのでしょうか、そういうことをやらせていただいております。月に2回陸前高田のほうでやらせてもらっているところです。

私は大学院もコミュニティ福祉学研究科だったので、そのつながりの中でNPOのほうも、今の陸前高田現地コーディネーターというところのお仕事のほうもそのご縁からいただいたというところです。

大塚賀 大塚さん、本日は、東北からいらっしゃったんですか。

大塚 はい。昨日の夜に高田からバスで来ました。

大塚賀 遠いところからありがとうございます。復興支援室の活動にすごく影響をうけ、そのことが今の仕事につながっているというんですけども、少し時間を戻していただいて、学部時代の政策学科のときの自分についてお話いただけますか。

大塚 杉本さんのお話にもありましたけど、コミ福にはすごくいい子が多いと思います。僕がいい子だったのか分からないですけど。

また生徒と先生方とすごく距離が近かったのを覚えています。たとえば、授業が終わった後、ちょっと気になることがあったりするんですけど、そういったところを質問に行くと丁寧にいつも対応してもらったなというのは印象に残っています。

大冨賀 何か福祉学科の子と政策学科の子で何か違いはありましたか。学ぶ方法とか違うとか。あるいはそもそも交流があったのでしょうか。

大塚 そうですね。英語のクラスで福祉学科の子と政策学科の子が居たのですが、すごく変な言い方ですけども、政策の子たちのほうが「はっちゃけていた」という感じはします。福祉学科の子たちのほうがすごくいわゆるいい子っていうふうな感じなのですが、そういった色は違うなっていうのは何となく感じていましたけど、明確に違ったっていうところまでは感じませんでした。

大冨賀 学部での生徒の個性にあまり違いはないということでしたけれども、友達の進路とかが違ったりするのでしょうか。

大塚 私の周りですけども、私の周りの仲間たちは一般企業に進むとかコミュニティ政策の友達ですけども、そういった企業に進むとか学校の先生のほうに進んでいるとか、そういった子たちは多かったかなと思います。福祉学科の友達は、福祉の道に進んで行くんだと言っていたりした子が多かったかなと思います。

大冨賀 ありがとうございます。それでは高橋さんお願いします。

高橋 はい。皆さんこんにちは。2012年卒(11期生)で福祉学科を卒業しました高橋と申します、人前でこういう場で話をするのは慣れていないのでかなり緊張しているのですが、温かい目で見ただけだと思います。私は今、大田区の蒲田にあります福祉事務所で生活保護のケースワーカーをしています。

生活保護というと生活に困窮されている方の支援ですけども、保護している世帯が流動的ですが100世帯前後ですね。主に高齢者の世帯だったり、精神疾患のかたがたが多いのですが、最近増えているのは、稼働年齢層というか働き盛り40代、50代でやっぱり失業されたり、派遣切りに遭って保護を受けざるを得ないという方ですとか、また母子家庭の方、あるいは身体障害を抱えた方ですとか、あと大田区は河川敷。多摩川が近くにあるのでホームレスで河川敷からとか、刑務所に入られていて出所したんだけど行く宛もなく保護の申請に来られる方ですとか、さまざまな方の相談業務ですね。定期的な訪問ですとか、あと何かあったときの相談の対処ですとか手続きなどの支援です。

あと、最近よくニュースでも時々あるかと思うんですけども不正受給。収入有未申告とか不正受給とかも増えているので、そういったときの調査ですとか本人への指導とういうのも仕事の中には入るかなと思います。今の仕事の経緯としましては、特に、生活保護の仕事を希望していたわけじゃないのですが、学生時代のときに私は女性福祉、家族福祉、児童福祉分野を専攻してまして、やっぱり福祉を4年間学んできたので何かしら福祉に携わる仕事を、何か困った方の支援をしたり、そういった方が立ち直っていく過程に何か自分ができることがあればいいなと思って、福祉系の仕事を選んだというところだと思います。

大冨賀 ちょっと大塚さんに聞いた質問と同じような質問をしていきたいと思い

ます。当時の学生の状況についてお話いただけますか。高橋さんが学生の時には3学科あったと思うのですが、学科間の学生の交流はあったのでしょうか。

高橋 そうですね、正直、スポーツウエルネス学科とコミ政学科の方と関わる機会があまりなかったという感じです。私が4年間やっている福祉学科の学生さんの印象としましては、特にグループワークなどでも、自分で意見を言うというよりは、周りの様子を伺うというか、みんなどういうことを考えているのだろうか、誰か話を話しをし出すんだらうというように、周りがお互いに様子を伺っているような印象でした。あとは、何か自分の目的だったり目標だったり何かするべきことを見つけたときには、すごいそこに全身全霊で取り組んでまい進できる力を持っているなという印象がありました。

やはり3年のときに現場実習があって、やっぱり4年生になると卒論をやるかやらないかに自然となると思うのですが、結構周りの学生さんの話を聞くと、いや、福祉学科だし、来たし、実習行こうかなとか、何かゼミの子がみんな卒論やるからやるかなみたいな話をする子も少なくはなかったです。ただ、いざやると決めて実際取り組んでいくと、ほんとにすごいそこに力を注げる力を持った学生さんが多かったなという印象を持っています。

大野賀 松尾先生のプレゼンの中で、コミュニティ福祉学部の学生は公務員になれる方が多いということだったのですが、高橋さんはどのような理由で公務員を進路として選択されたのですか。

高橋 正直、進路については、非常に迷いました。3年生の今頃ですね、公務員になるか、あるいはもともとやっぱり現場思考というのも強かったので、現場に行きたいっていうのをよく聞きました。私は、正直そのときはもう焦っていて何かを始めなければいけないという気持ちが強かったので、特別区の試験ですと6月、5月にはもう試験があるので、それに取りあえず今できることとして公務員の勉強を始めてみよう、それでもし公務員の試験に落ちてしまったら現場も考えようかなってというような気持ちで、公務員の勉強始めて目指したのがきっかけですね。

大野賀 ありがとうございます。それでは、杉原さんお願いします。

杉原 皆さん、こんにちは。2012年卒(11期生)、スポーツウエルネス学科としては第1期の卒業生の杉原宗です。現在はコミュニティ福祉学研究科のコミュニティ福祉学部の大学院の博士課程前期課程の2年生です。

松尾先生のゼミでスポーツ社会学、テーマとしては高校野球の指導の在り方について研究しています。来年度からは岐阜県の高校の体育の教員として赴任する予定です。もともとスポーツウエルネス学科に入りたいと思ったのは、やっぱり体育の教員として教員になりたいという思いがもともとありました。そういった思いもあって大学4年生のときには教員採用試験を受験したのですけれども見事

に一次試験で落ちてしまいました。そこで現状のままで教員になるよりは、より教員としての幅を広げるために大学で専門的にスポーツについて考えて、教員になろうと思って大学院に進学しました。

それで大学院の1年生のときに教員採用試験を受けまして、そこで何とか合格をいただきまして、岐阜県の場合は合格後1年間待ってもらえるということで、来年度から保健体育の高校の教員として赴任することになっています。

大学時代は体育会野球部に所属しておりまして、大学院の2年間も体育会野球部のコーチとして活動をサポートして、自分自身野球の指導の勉強をさせていただきました。

今は修士論文の執筆をやらなければならないと思いつつも、なかなか作業が進まない自分にもやもやしながら1月8日の提出に向けて焦っている状況です。

大冢賀 お忙しい中ありがとうございます。杉原さんは、スポーツをなさっていますが、コミュニティ福祉学部にも所属しているんだよと言われたときにはどのように感じますか。

杉原 最初、入学したときは何で福祉学部の中に何でスポーツ学科があるんだっていう思いがあったのですが、他の体育大学とかスポーツ学科にはないものとして、学部共通科目で他の福祉であったり、政策の授業を受けられるっていうことはとても強みだと思ってきています。

保健体育、スポーツを教えるのではなくて、これからの保健体育ということは、これから自分で生きていく上での学びだと思っているので、その中で自分が老いていったり、その中で社会に出たときに次期のコミュニティを形成していく1人の人間として、育っていく要素を体育の教員として保健体育の授業の中で展開できたらいいと思うので、それはとても良かったかなど。そういった教員が育てられる強みがコミュニティ福祉学部にあるのではないかなと思っています。僕はまだ全然教えてないですけど、こういうことをしたいなというふうに思います。

■印象的な授業、今の仕事につながっている学び

大冢賀 ありがとうございます。これから具体的なカリキュラムの話に入りたいなと思います。

5人のシンポジストの方に当時の印象的な授業であったり、今の仕事につながっている学びについて印象に残っている出来事を今から伺ってほしいと思います。

その前に、卒業生のお話を伺った上で、カリキュラムの教育の特徴とか追加的な説明がありましたら先生方お願いします。

松尾先生 みなさんのお話を伺っていて一番難しいなと思ったのは、各学科の専門科目と学部共通科目のバランスについてです。

以前は、全学共通カリキュラムを担当している先生方、宗教とか人間学とか、

あるいは英語であるとか多様な先生がコミュニティ福祉学部にも所属していらっしやっただので、人間学を中心にしながらさまざまな学びができたわけです。そしてそれらの科目を学部共通科目として配置した。ところが、3学科になったとき、どのようなカリキュラム構成のか考えなくていけないという議論が起きました。最終的に2012年から新しいカリキュラムに変えたのですが、その内容は学部共通を少し減らして、1年生からもやっぱり各学科の専門的な事柄も学べるようにしました。なぜなら、学科横断型の学部共通と言われる授業を多くするとどうい現象が起こるかということ、例えば、政策学科に入ったのだけど、「いったい政策の授業っていつから始まるのですか」、「1年生ときは宗教しか学んでないです」といった状況がでてきます。

こういった状況を解消するために、共通の学び、福祉という全体の学びとそれぞれの学科の専門の学びをどういうふうに両立させなかせら展開するために、カリキュラムを変えたのです。

今、杉原君が言ってくれたようにいろんなことも学べるバランスについて考えるために、本日参加されている卒業生の方々は、どのように当日カリキュラムを捉えていたのかももう少し聞いてみたいと思います。今、学部では、この学びを何とか両立させるような形でカリキュラムを展開する。なおかつ、いわゆる現場の学びをきちっと展開し、少人数教育の徹底をしているところであります。

大野賀 福山先生は何かございますか。今も卒業生の方と交流があると思うのですが、昔の卒業生と今の卒業生と何か学んでいることが違うとか感じますでしょうか。

福山先生 あまり変わらないですね。私の卒業生の1人が一番ここに居ますが、彼が居たころ、2学科になるまでは、心理系の科目がたくさんあったと思います。しかし、さきほどお話ししましたが現代心理学部ができることになって、学科の特色を再考する必要に迫られた中で、コミュニティ福祉学部における心理学、宗教学の位置付けを少しずつ整理していったのだと思います。翻って、心理学は究極的に何を扱うのかと言えば、人とのつながりとか人を理解するとか、共感するとかそういうことであると思います。これは、福祉そのものでも当然在り得るし、学術用語の上でも、福祉学の中に受容とか共感とかそういう心理学用語もたくさん入ってます。よって心理学と言わなくても、コミュニティ福祉学部の教育の中に、人間を見るまなざしは当然受け継がれていってると私は思います。

何といってもいろんな調査をしてみると、コミュニティ福祉学部は先生と学生との距離が一番近いというのが学生のアンケートでいつも全学部と比べて第1位なんです。そのぐらいアットホームというかファミリーな感じがあり、これもずっと受け継がれてきてると思います。

例えば、私のゼミ合宿では、それこそ1期生のゼミの卒業生もたくさんゼミ合宿へ来てもらっていました。ゼミ合宿は、本来教員である私が主導的にやるべきですけど先輩たちも参加してやるというような構図をずっと伝統的に作ってきたのです。

大冢賀 先生方ありがとうございました。それでは、当時印象に残ってるような授業とか、あるいは今の仕事に役立ってるなど思うような授業がありましたら思い出していただいて、何か話をいただければと思います。

松森 私は、当時の授業先生方が経験されてきた現場の雰囲気を感じさせてくれるような授業が好きでしたね。例えば、実際に先生方自身の経験からお話しくださる現場の出会いや支援といったことでしょうか。そこに先生方の葛藤であったりとか、またはやりがいであったりとかがメッセージとして含まれていたような気がします。そのような授業は非常に私の中には残っています。

私たちは、こうした言葉をそれを自分自身の中に1回置きます。まず自分の中に1回入れた中で考えて、改めて関わりとはなんだろうかと考えていたと思います。

今、私は人と関わる現場に居るのですが、その人と関わることの姿勢のようなものっていうのを非常に学んだかなと思いますし、それは今も私の大きな土台の一つになっているかなと思います。

大冢賀 ありがとうございます。それでは杉本さんお願いします。

杉本 あまり覚えてないというのが正直なところです。あえてあげるのであれば、フィールドスタディでしょうか。バングラディッシュにも行ったし、その後はお遍路を河東先生の授業で回ったこともありました。あるいは、秩父に行ったりしたのをすごく覚えています。今日そこに座っていらっしやる浅井先生の顔を見てフラッシュバックのように思い出したのですが、児童福祉論で浅井先生がすごく真面目な顔をして性教育について語っていたことが印象に残っています。

大冢賀 ありがとうございます。では、大塚さんお願いします。

大塚 僕もあまり覚えていないですが先生方の話されているワードというか、そういったものはすごく頭に残っています。お二人が今おっしゃっていたように先生と会うとフラッシュバックされますね。今そのお話を聞きながら考えてたのは、インターンシップ実習、フィールドスタディもそうですけども、そこでの実際に現場に行くという経験がすごくそのまま生きてるなど感じます。新しいカリキュラムとしてその場に生活するとか住みたいなのを作ってほしいなぐらいに思っていたところです。

大冢賀 ありがとうございます。それでは続きまして、高橋さんお願いします。

高橋 私は、ほんと入学直後に受けた、亡くなられた尾崎先生の社会福祉援助技術総論という講義が非常に印象に残っています。といいいますのは、私もただ単に福祉に興味があって入学をしまして、福祉というのはどういうものかとか全く

分からない状態でその授業を受けたときに、一言で言うと対人援助とはどういうことか、ほんとに目の前に居る人の声のトーンだったり、表情だったりいろんな要素からくみ取って目の前の人を支援していく、援助していくというのはどういうことかっていうのをその授業でほんとに教わったような気がします。本当に自分の人生にも影響を受けている授業です。

皆さんもいろんな友人とか身近な人から相談を受けることもあると思うのですが、私は当時、同じように相談を受けた際、何か役に立ちたい、問題を解決したいと思うのですが、そういうノウハウが全くないので、人の相談を聞くときにどういうことに気を付けて会話をしていったらいいのかとかすごく悩んでいるところでした。

そういう意味で自分の周りの人との関わり方であったり、自分のコミュニケーションを見直す大きなきっかけになった授業だったので、ほんとにその後の人生に大きく影響を受けた授業だなということで、非常に印象に残っています。

大夢賀 ありがとうございます。それでは、杉原さんお願いします。

杉原 私は教員にまだなっていないのですが、体育の教員ということで、高校時代とかは男性の方は多分ダンスの授業とか一切やってこられなかったですけど、大学に入って、授業で初めてエアロビクス、ダンスをやったことが印象に残っています。

学習指導要領が変わって、来年からももしかしたら僕もダンスを教えるかもしれないのですが、その礎をそこで築けたかなとは思って、生かすことができればいいなというふうに思っています。

■ コミュニティ福祉学部 に期待する 今後について

大夢賀 皆さんのお話から印象として今の仕事につながっているような姿勢は学べた気がするといったことや、コミ福の先生との距離の近さや、課外活動で学んだことが今につながっているということが伺えました。

次に、これからコミュニティ福祉学部はこういうふうになったら面白いのではないかとことを卒業生に皆さんに伺っていきたいと思います。その前に、先生方から話をいただいてもよろしいでしょうか。

福山 私はもう定年退職した身ですから、これからコミ福にこうあってほしいということは特にありません。その代わりに皆さんに、コミ福の教諭として私が15年間で学んだことというのをぜひ共有していただけたらと思います。

最初、私は心理学やカウンセリングを福祉学の中にどうやって入れ込むか、どうやって福祉学と心理学を共働できるかってそういう発想でした。つまり、言ってみれば心理学を埋め込む感覚でいました。しかし、定年退職になるにあたって、コミ福時代って僕にとっていったい何だったんだろうかっていうふうに思い返し

てみたら、私の中に浮かんできたのは一つでした。

福祉という学問は、決して人間のあらゆるひたむきさに目をそむけないという学問だってふうに思います。そのことは、多分他の学問が寄ってたかって多分太刀打ちできないだろうというふうに思います。そうではなくて、そこに尊厳とか価値とかそういうのを見出そうとする、何かそういう希望を持っている学問だっていうふうに私は信じると思います。

ですから、ぜひ、皆さん多くは卒業生の方もいらっしゃるのですが、現役の学生の人たちがこれからそういう学部の中に皆さんは居たんだということを、ぜひ再確認していただけたらうれしいなというふうに思います。以上です。

大夢賀 福山先生ありがとうございます。それでは、卒業生の皆さんにお話を伺っていきたいと思います。

松森 私は1期生で、今までの話で学科が増えているという話しが出ていましたが、私の中ではコミ福はコミ福で一つなのです。そこにはやはり心理であったり宗教であったり、福祉であったり、もうほんとにいろんな学問があって、それで大きく一つのコミ福だっていう私の中の感覚です。逆に今、いろんな分野に細分化していくところがありまして、これは少し寂しいなとも思います。

私自身、現在精神科のデイケアという所で働いているのですが、チームで働いています。臨床心理士が私一人だけで、あとは作業療法士だったり看護師であったり、医師であったり、精神保健福祉士であったりとか、いろんな職種が関わっています。

そしてチームとしてその一人の、自分たちの目の前に居る人たちがどういうふうにその人らしく生きていけるのかというふうなところを考えているので、そういった中では一つの学問的な背景とかでは、なかなか選択できない様々な考えがあって、その中でその人のためにどういったことを選ぶことができるかっていうことが、そのチームの中で求められてきています。

私の中でそういったいろんな職種とつながりながら支援というものを考えていく上では、非常に柔軟な考えというのが重要だと思いますので、これからもコミ福の学びがまた細分化していく中でも何か、ちょっと「ごちゃまぜ」の要素もカリキュラムの中に欲しいと思います。

杉本 もっと皆さんが突き抜けるぐらいいろいろ一つのことをとか、何か積極的に動いていたほうが、その中でコミュニケーションも楽しいのかなというふうに学生時代はそう感じていました。

具体的にいうと、結構公務員志望の人たちも学問としての福祉に興味を持って悶々として学んでいるというような印象を受けることが多いです。例えば、一緒にじゃあちょっと今度ボランティア行ってみようとか、言ってもそういう所にはあんまり来てくれないといったこともありました。

あと、社会人になって社会人になって思うのは、やっぱり学生時代って、何かきょうは忙しいって言っても1日のうち1時間だけその予定があるとかそういうような日々があったのもっとすごく時間があったと思います。例えば、今日みたいなシンポジウムみたいな場所にもっと現役の学生を引っ張って来るとか、力が全体からわき出てくるようなとか、具体的には言えないんですけど、何かそういう力がコミュニティ福祉学部にはあると思います。

全員がそういう体験というか、体験することがいいことだとは言えないのですが、何かそういうのもっともっと一人一人がいろんなことを突き抜けて経験して、みんなで持ち寄って活発に議論するとかそういうふうになっていくと、すごく面白い学部になるのではないかなというふうに感じています。以上です。

大塚 僕は具体的にこうというものがそんなあったわけではないのですが、ただ、現場に行つてというか、むしろその現場で生活するとか住むとか、そのようなものがあるといいと思っています。

僕が現に今陸前高田に住ませてもらっていて、住むといろいろと分かることがあります。

陸前高田は、震災で大きな被害を受けて今大変な状況であるのですが、その中で住んでいる中で、例えば、洗濯物を干していて、外回りに出ていて雨が降ってしまって、ああやばいってダッシュで帰って来るときれいに玄関に洗濯物がたたまれて置かれていたりするとかがあります。あるいは、周りの人々が「おまえ、最近おいしいもの食っているか」と来てくれたり「かつおが取れたぞ」と言って持って来てくれたりとかといったこともあります。

そこに居なければ、全く分からない、経験もできないことはたくさんあります。居るといふことの大切さ、存在することの大切さということをもっと現場に出る中で皆さんに感じてもらえるといいのかなと思っています。

高橋 私が学生時代のときに非常に印象に残っているカリキュラムがもう1個がありまして、2年生の夏季休暇中に対人コミュニケーションという福山先生のカリキュラムです。この講義を通してコミュニケーションには多様性があるということ非常に学ばせてもらいました。

コミ福というものを考えるときに、もちろんスポーツもコミュニケーションを取る手段の一つだと思いますし、コミュニティ政策、コミュニティを形成していく上でもやっぱりコミュニケーションが必要ですし、福祉学科ということで人を支えていく、支援していく上でもコミュニケーションっていうのはやっぱり必要となっていくと思います。

そういうコミュニケーションについての考えと、自分のコミュニケーションについて考えられるカリキュラムがあると、より一人一人の学生さんがコミュニケーションというのに興味を持って、意識を高く持って、また日常生活の中でも

過ごすのではないかなというふうに思っています。

これは今日、声を大にして言いたかったのですが、コミ福に入ったから、福祉学科にいるからといって福祉関係の仕事に就いてほしいとは全然思わないのです。もちろん、コミュニティ福祉学部を出て福祉の現場に就職すれば、いろんな仕事で生かせる部分もあると思いますし、仕事以外日常生活の中でも学んだことを生かせるようにすることあると思います。

しかし、私としては、社会を見るうえでいろいろなニュース、物事を見るときに表面的な部分で捉えるのではなくて、その背景をベースにどういう社会事情があって、一人一人にどういう状況があるのかっていうことをぜひ考えて、考えられる人たち一人になってほしいなという思いがあります。

例えば、ニュースで虐待、子どもを殺しちゃったとかネグレクトで死んじゃったとかっていうニュースがあるときに、翌日職場に行くと年配のかたがたが「ねえ、ニュースで子どもが死んじゃってね、おばあさんもよくそっちに遊びに行っていて面倒見ないで子どもがかわいそうにね」みたいな話を聞ききます。表面的に言うと、報道の仕方もありますし、そのお母さんが悪者というか、ただ単に育児を放棄して遊んで夜の仕事をし、子どもを殺しちゃったというふうに捉えられるかもしれないですけども、じゃあそうなったのは、どういう背景があるのかということですよ。

例えば、子どもを保育所に預けられなかったりとか、男女の賃金格差があって、夜の仕事をせざるを得なかったということがあるかもしれません。ダブルワークでなくも複数の仕事をやらざるを得なかったという表面的なことではなくて、その裏にはどうしてそういう事件を起こしてしまったのかっていうのを、その当事者の責任だけでなく背景にどういう社会事情があったのかっていうのをぜひ考えられる人になっていただけたらなというのが私の思いです。

杉原 こんなカリキュラムがあったらいいなということですけど、松尾先生がおっしゃられたように、コミ福としての学びをしっかりと、どの学生も学べるようなカリキュラム作りっていうのは大事ななというふうに思います。あと、それぞれの学問、コミ福全体に言えると思うのですが、とても現場に近い学問かなというふうに思っています。

実際の現場、実践によりアクセスできるようなカリキュラム作りがどんどんなされていくと、やっぱり具体的な姿が見えないと学生もつまないだろうし、より自分がその学問にのめり込めるのは実際の現場に近づくことが大事かなというふうに思うので、学生の現場がどんどん近づいていけるようなカリキュラムができれば、もっともっといいのではないかなというふうに思います。

あと、現役の学生さん、特に学部生の方はやっぱり卒業論文は取ったほうがいいと思います。なぜなら、そのテーマについてとことん向き合って文字をつむぎ

出していく作業は、多分大人になったらなかなかやらない作業だからです。

でも私はこれで最後にしたいなというふうに思っています。そのことについてしっかり考え込むという作業は、とても大事なことだと思うのでしたほうがいいのではないかなと思います。

■今後のコミュニティ福祉学部の展望

大野賀 5人の方から今後コミ福はこういうふうになったらいいなという話をいただきました。

少しまとめさせていただきますと、現役生には振り切れる意識を持ってほしいと杉本さんからいただきました。学科横断的な昔のような要素をもうちょっとあったらいいなという松森さんの意見もありましたし、現場に長期滞在するようなプログラムをぜひ考えてくださいと、大塚さんからいただきました。あるいは、高橋さんからは対人コミュニケーションのような前につながるようなスキルが身に付けられるようなきっかけになるような授業が欲しいし、最後に杉原さんはもっと現場に出て行くような姿勢のプログラムとか、あとはスポーツ学科でもコミュニティ福祉に関わる全てを学べるようなカリキュラムづくりをしてほしいという卒業生からのリクエストがありました。

このような視点を踏まえて、最後にちょっと今後の展望を踏まえて最後に松尾先生にお話をいただきたいと思います。

松尾 最後に私からは3点、お話をさせていただきたいと思います。

まず学生を対象に行った調査の結果を見ていただきたいのですが、立教学生にアンケートをとると、自分が入学する学部が第1志望だったかということを知るとコミュニティ福祉学部の場合、実はあんまり多くないのです。ところが、卒業するときに立教大学生の卒業生となることに誇りを感じるとか、満足しているかという項目をみると、コミュニティ福祉学部が全学部のなかでトップに立っています。

ですから、先ほどコミ福は生徒と先生方の距離が近いという話がありましたけれど、学部としてはできるだけ学生に「ああ、ここ来て良かった」と言ってもらえるような教育をこれからもしっかり続けていく必要があると思っています。

今日、コミ福の学生の特徴でグループディスカッションするときに黙って聞いている子が多いという話があったと思います。でも実はそれは強みだという話を1点目にしたいと思います。

各大学卒業生対象に、他の大学の卒業生と比較して、自分たちはこの能力は劣っているあるいは勝っているという項目をみたのがこれから紹介するアンケート調査です。

データをみると、立教の学生は、みんなの意見をしっかり聞いて取りまとめていく力っていうのは、やっぱり立教は非常に優れていると卒業生は評価していま

す。コミュニティ福祉学部を中心として、立教学院の卒業生全体の特徴だと思いますけれども、よく人の意見を聞くということです。これはフォロワー型のリーダーシップと言ってもいいかもしれませんが、非常にこれは強みです。先輩諸君におかれましては現役諸君におかれましては、ぜひこの力をぜひ伸ばしていただくといいなというのが1点です。

それから2点目です。先ほど全てのいわゆる悲惨な状況から目をそむけないという福山先生のお話がありましたけど、これから人口減少社会が始まります。これから高齢化はますます進行し30年後には36パーセント超えます。こうなったとき誰も経験したことのない社会にあって、これまでの競争社会からみんながほんとうに共生して生きていけるのかを考えなくてははいけません。成熟社会の扉は開いたのです。

こういう中であって、勝ち組、負け組っていう発想ではやっぱり限界があると思います。全ての人がその人らしく生きていく、福祉マインドとはその人が、その全ての人が、その人らしく生きていけるように心を尽くす精神のことです。要するに、全ての人がどうやったら豊かに生きられるかという議論の中で、やっぱり福祉がこれからの時代を担う中心的な学問になるのだと思います。そういった意味で福祉がこれからの先端の学問であるということ認識して欲しいというのが2点目です。

3点目です。22歳の人たちがどんな時代を生きてきたかっていうのを見てみました。産まれたときにバブル崩壊でした。次にバブル期による就職氷河期が始まります。そして、幼稚園になって阪神淡路大震災があります。さらに、小学校になってアメリカの同時多発テロ事件がおこります。

次に、中学校期になりますと、中越沖地震が起こっています。そして、スマトラ沖の地震もあります。高校期には、今度はリーマン・ショックが始まります。これによって世界経済危機に陥るわけですね。そして大学期には、東日本大震災が起こる。まさにこういった状況です。

こういう中であって、日本私立大学連盟という120を超える私立大学が加盟する団体が、大きな調査をやりました。調査対象者は、7,000名を超えます。この結果から、とてもまじめでこつこつやる学生諸君の像が見えました。

今日、来られている先輩諸君のほとんどを私は存じ上げていますが、みな大学時代からもがいている。

「これでいいんでしょうか？」ともがいていた人たちが今、こうやって社会で活躍してくれています。

この会場には現役の学生諸君もいらっしゃいますけれども、自分にトライしながらチャレンジしていく。常に迷って行く。迷いながら、迷いながらも、一歩先にといい気持ちで臨んでいく、そういう人であってほしいし、そういう人を

作っていける学部でありたいと思っていますところがございます。本日はどうもありがとうございます。

■フロアとのやりとり

大冢賀 松尾先生そして福山先生、シンポジスト5人の皆さまありがとうございました。最後に質問を受け付けたいと思います、何かフロアのみなさまシンポジストの方に聞いてみたいことはありますでしょうか。

福田 貴重なお話をありがとうございました。コミュニティ政策学科3年の福田です。今までいろんなコミ福を多面的に見る意見とかもいっぱい出たと思うのですが、最後にこれがコミ福の特徴だということを一言皆様に伺えればと思います。

松森 非常に難しいですね。私のときというと、皆さん方のときは何か自己主張が少ないとか、そういったような話とかもあったと思うのですが、私のときというのは、もうほんとにいろんな人がいろんなそれぞれの立場から、いろんな意見を言い合ってたというふうな、時代だったと思います。

先ほどの話でもあったと思うのですが、自分が楽しいとか自分がこれが大切だなと思うところを、しっかりと他の人たちと話しながら、自分自身を磨いたりとか自分自身を試したり、時にはへこんだりとか、そういったことが日常的にいろんな仲間とかいろんな先生方とできるのってことがコミ福なんじゃないかなっていうふうに思います。

杉本 真ん中のほうに座っている馬場君を見て思い出したのですが、コミ福イコール進歩的の石頭であると思います。以上です。

高橋 僕もコミ福に居させてもらって、一番強く思っているのはつながり強さですね。なので、先生も仲間も後輩もみんな含めてのつながりの強さが特徴かなと思います。

大塚 ぱっと思いついたことで言いますと、答えがないことをひたすらと追い続ける学問かなと思います。先ほど言った尾崎先生の授業でも人と向き合うことは何か、別れを見つめ直すとか、何だそれっていうことを、ほんとに90分ひたすら考えて、授業が終わった後も友達と話し合ったりしていた記憶があります。世の中にはいろんな意見があって、みんなの意見が正解だし、一つの答えを導くのがすべてではないと思います。正解を導き出すというよりは、みんなの意見を出し合っていく、答えのないことを追い詰めることも重要だと思います。

杉原 コミ福とはスポーツウエルネス、福祉、政策、教員、現役生、そしてOBがつながりを大切にできるか、ではないかだと思います。以上です。

大冢賀 みなさま長い時間、ありがとうございました。それではこれでシンポジウムを終わりにしたいと思います。もう一度シンポジストの方に盛大な拍手をお願いします。